

大金塊発見その後

徳永重元¹⁾

現在地質標本館の第4展示室の一隅に1個の金塊標本が置かれている(写真1)。それは地質標本館を紹介するエハガキにもなっているので知っている方も多いと思うが、この鉱石は偶然の機会に産出・発見されたものである。

もう遠い昔のことになってしまったが、明治37年(1904)筆者の父徳永重康が現在の宮城県気仙沼市の北方鹿折金山(第1図)に技師長として赴任していた折産出したものである。

何故本来化石屋である者が金山の技師長になっていたのか、その頃は地質学を学んだものであれば地下のことは何でも解ると思われ、化石を発見し、記載すればそれは新種となり、地質調査をすればそれは後の基礎資料となる、といった地質学界の草創期につぐよき時代であったからであろう。

鹿折金山では明治37年坑道が大鉱脈(大直利)に当たったのであった。その採掘状況の具体的なことは既に記述した(地質ニュース313号, 1980年9月号)のでここでは繰返さないが、伝えられる所によると2.25kgの金鉱石の中に1.875kgの金が含まれていたといわれ、今残っている標本をみても金と他の石英等の割合はこれを肯定できる。

この大金塊はその後怪物金(Nugget "Monster")と称され(写真2)、同年米国のセントルイス市で行なわれた万国博覧会に出品銅メダルを得ている(写真3)。その賞状の写しは現在気仙沼市長室に掲げられている。

さてこの大金塊はどの位目方があったのだろうか。又その後の行方はどうなったのか。私は気仙沼市当局の御好意でその展示品の写真を入手、現在地質標本館にある標本と比べてみた所、正にその1部であることが判明した。とくに破目の形状が博覧会に展示されたものと一致し、現在展示されているものは本体の約1/6と推定できる。

現存の標本の目方が326gであるから全部で約2kgのものと考えられる。

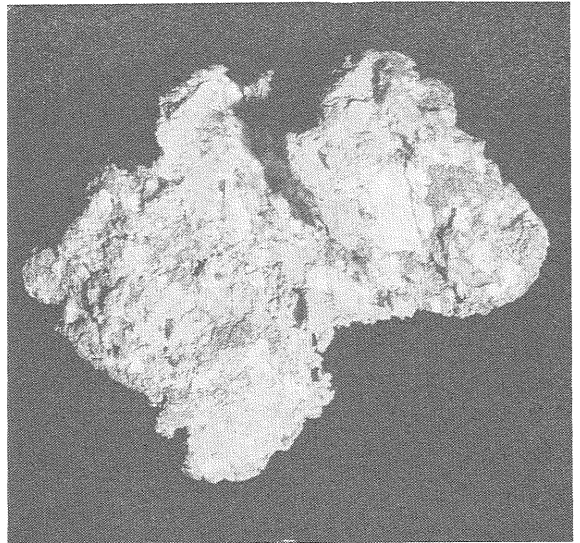


写真1 地質標本館に展示してある金塊。

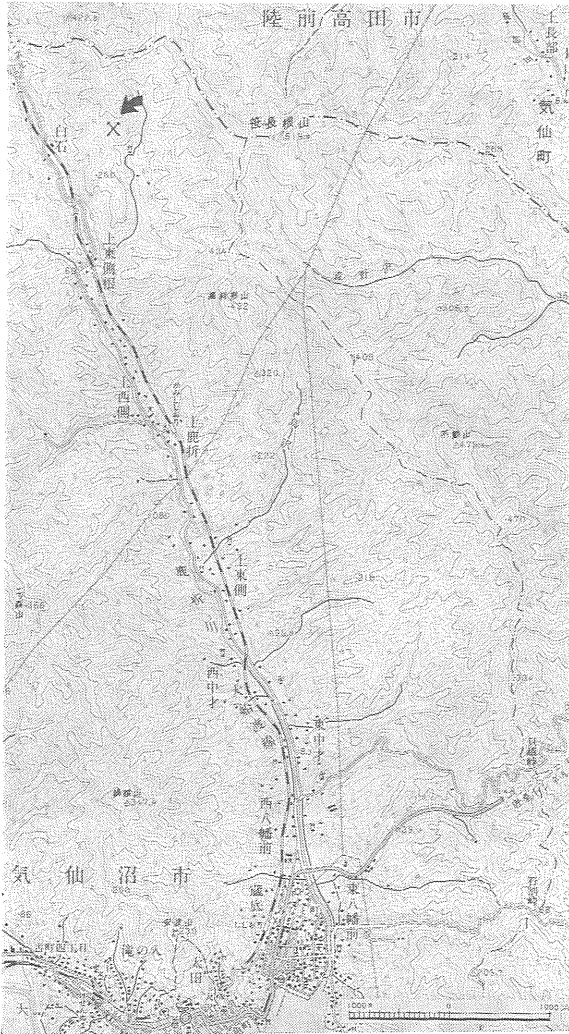
それ丈ではなかった。当時の記述によれば「産出金のごく小部分を標本として保存し…」とあり、その他当時産出鉱石の売却代金が10万円(現在に換算すると1億5千万円)に達したという記述もある。

では残りの5/6の行方は? この金塊をめぐるは色々の噂が生れている。明治37年といえば丁度日露戦争の始った年であった。戦局が永びくにつれ我国は戦費の調達を欧州各国とくに英国に求め、その時の日銀副総裁高橋是清はその交渉の中で話題の1つとしてこの金塊を持参したとか、金塊はその後某銀行に納めたとか、さる所に献上したとか、今となってはいつれも確証はえられない。

ただ1つ大英博物館において鹿折産の金鉱石をみかけたという有力な情報がよせられた。英国にまで金塊をもって行ってそのまま置いて来たのだろうか、それならば今、日本にあるのは? その追跡はいよいよミステリーとなって来た。

1) 元所員: パリノ・サーヴェイ株式会社
〒103 東京都中央区日本橋室町2-1-1 三井ビル

キーワード: 自然金, 地質標本館, 鹿折金山, 金鉱, 気仙沼



第1図 鹿折金山の位置 (X印)。
 (国土地理院1984年発行 5万分の1地形図「気仙沼」
 の一部を使用)。

気にかかるので私自身大英博物館所属地質博物館にその所在を問合せみた。すると親切にも標本担当の Oldshaw 女史より返信があり、ロンドンの地質博物館内には見当たらない、さらにウェールズとマンチェスターの地質博物館にも問合せみたがないという返事をうけているということだった。

それならば大英博物館そのものの本館にあるのだろうか。私はさらに追跡をつけてゆこうと思っている。

それはそれとして鹿折金が産出してから約80数年経った1989年7月7日、金山関係の物故者を弔らう供養会が気仙沼市地元の有志の方々の発起で行なわれ、私も関係者の一人としてお招きをうけた。鉱山そのものは其後幾

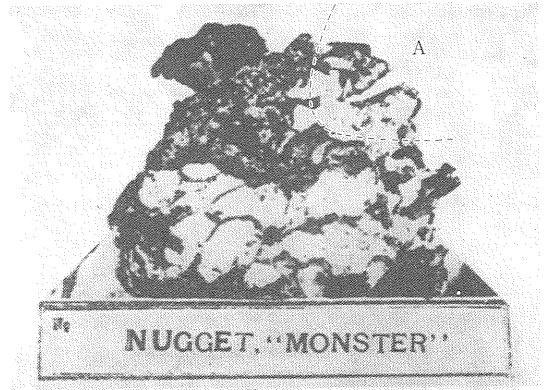


写真2 セントルイス万国博覧会に出品された金塊のAの部分が地質標本館に展示されている。

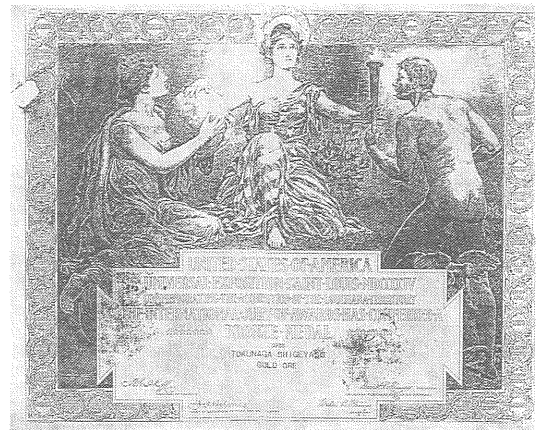


写真3 セントルイス万国博覧会から贈られた賞状。

度か鉱山主が代ったが、33年前(昭和33年頃)まで稼行がつづけられていたそうである。

現地の関係者とくに従業員であった方々や地元の金山によせる思いには熱いものがある。気仙沼市は従来海洋に関する比重は大きかったが、今後は他の面とくに観光および1億円町おこし運動等にも力を入れ多彩な町づくりをやってゆきたいとは供養会に出席された市長さんの言であった。

これに答えることが出来るか否か、旧金山の地帯を公園にして、かつての繁栄をしのぶという声もあった。旧坑は気仙沼市街の北方約9kmの谷間にあり、現在でも第1坑(写真6)、第2坑等その他の坑口をみることが出来る。

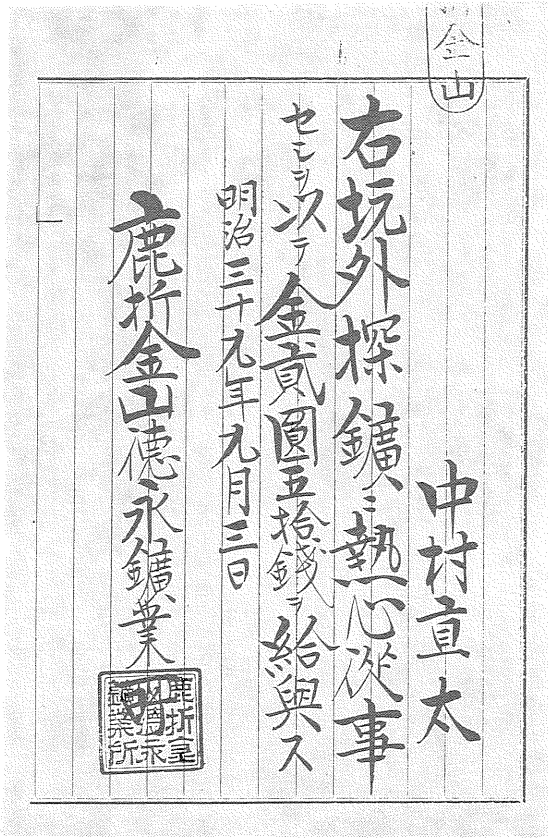


写真5 当時の賞与支給通知.

人も集っていたということである。

「坑壁には金の鉱石が一面に光り輝いて…」という生々しい体験談（実は気仙沼弁で私にはわからないこともあったが）などを聞くにつけても、また再びこのような金鉱が見つかるだろうか、私の提供した金塊をこえるものが発見されることが期待できるのか…。

それは遠い過去の話になってしまったような気がする。

帰途私は金にまつわる関心から平泉の中尊寺金色堂を訪ねてみた（写真8）。気仙沼からこの地まで直線距離にして約 50km、奥州藤原氏全盛の頃は各地から物資が集ったことだろうが、気仙沼や岩手・宮城県境の金山から藤原氏へ献上した金のことは古文書に残り確認されている。

光り輝く金色堂（再建され更に輝いているのだが）の造営に当って、岩手の山をこして“金の道”がつけられていたことを思いつつ、衣川の緑の平野を回顧の念をもって



写真6 第1坑口（左の暗い部分）.

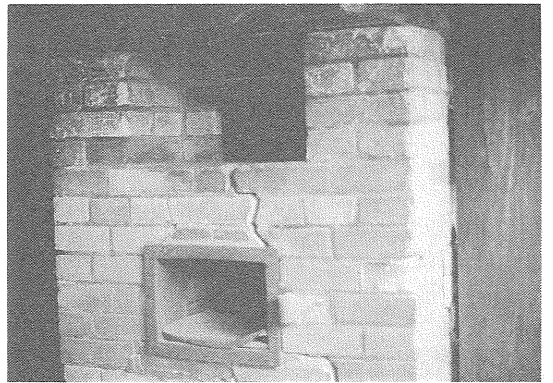


写真7 農家にのこる金精錬炉.



写真8 中尊寺金色堂.

眺めたのである。

TOKUNAGA Shigemoto (1991): The finding of nugget; afterwards.

<受付1991年3月1日>